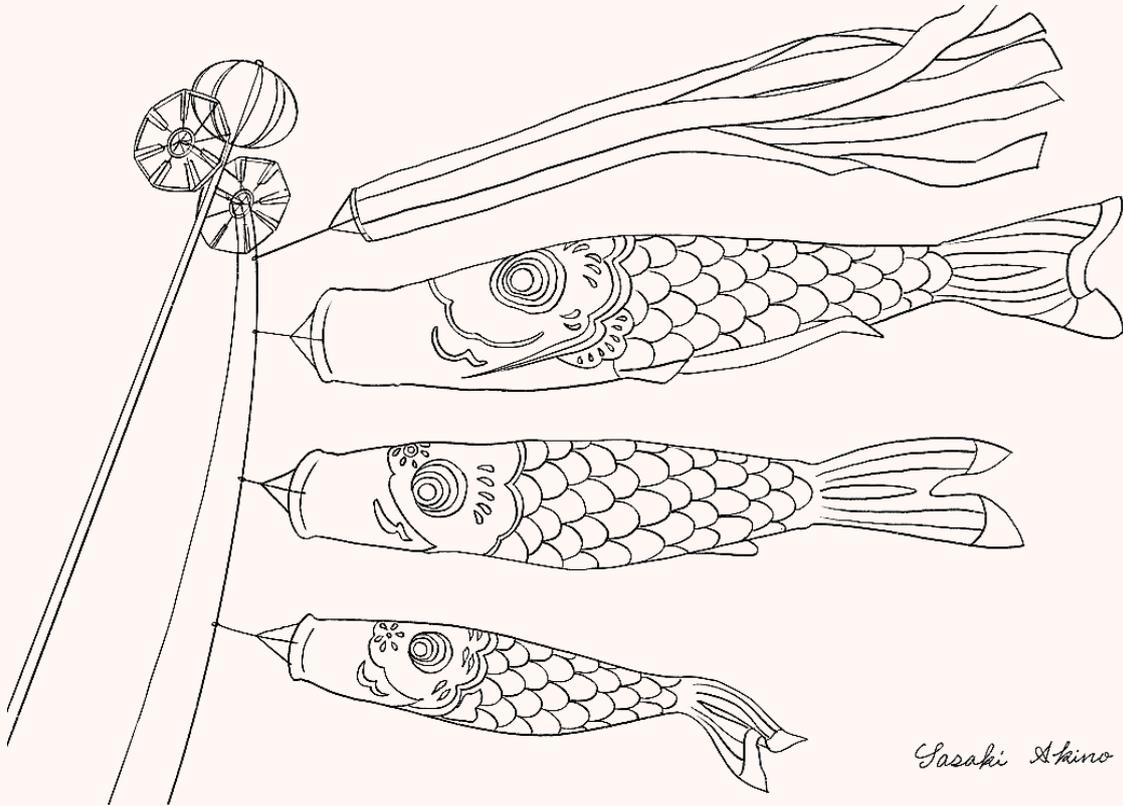


ごがついつか こ ひ
5月5日 子どもの日



(Drawn by Akino SASAKI)

こ 子どものころ、^{ぼく}僕たち家族はととても小さい家に住んでいた。生まれたときから、
^{ぼく}僕には父親がいなかった。^{ははおや}母親は僕を祖父にあずけて、^{そと}外に働きに出ていた。
^そ祖母も外で働いていて、あまり家にはいなかった。^{ぼく}僕の小さいときの記憶の中心
は、いつも祖父だった。

^そ祖父は僕をかわいがってくれた。^そ祖父は家族の中で一番器用で、^{つく}作るのが大変
なお菓子などもよく作ってくれた。^{とく}特に、あんこの入った和菓子作りが得意で、
^{まいとし}毎年5月5日の子どもの日には、^{かしもち}柏餅を作ってくれた。

ぼく す いなか おとこ こ う いえ かなら こい
僕の住んでいた田舎のほうでは、男の子が生まれた家には、必ず鯉のぼりが
あった。おとこ こ う しんせき いわ こい おく しゅうかん
男の子が生まれたら、親戚がお祝いに鯉のぼりを贈る習慣があったか
らだ。きんじょ おとこ こ こい はしら いちばんうえ やぐるま
近所の男の子のうちの鯉のぼりはたいてい、柱の一番上に矢車がつい
ていて、ふ なが した には、くろ あか あお さんしよく こい
吹き流しの下には、黒、赤、青のそれぞれ三色の鯉のぼりがセットに
なっていた。ふ なが した さんびき こい たの そら およ いちばんおお くろ
吹き流しの下で、三匹の鯉が楽しそうに空を泳ぐ。一番大きい黒が
おとう さん つぎ おお あか かあ ちい あお こ ども。それは普通の
ひと かんが りそうてき かぞく すがた
人が考える、理想的な家族の姿だった。

ぼく す ちい いえ こい ほか いえ
僕が住む小さな家にも、鯉のぼりがあった。でも、それは他の家のとちよつ
とちが 違っていた。まず、いっびき あか こい おお こい
一匹だけの赤い鯉のぼりだった。しかも、とても大きい鯉
のぼりだった。なぜ、そんなおお 大きくていっびき あか こい
一匹だけの赤い鯉のぼりだったのか、わか
らない。とにかく、それがぼく ためのこい
鯉のぼりだった。

あか こい おお つよ かぜ ふ そら およ
その赤い鯉のぼりは、大きすぎて、よほど強い風が吹かないと空を泳ぐことが
なかった。だから、かぜ 風がないときはだらりと大きな体をおお からだ き
をぶら下げて、ほとんど
うご 動かなかった。そのこい 鯉のぼりはあまりに大きかったので、しっぽが地面に着くぐ
らいだった。ちい 小さかったぼく は、そのしっぽをひ ぼ ば からだ ま つ
引っ張ったり、体に巻き付けたり
してよくあそ 遊んだ。



「あ！もう、こんな時間！」

とけい み ぼく ころ なか おも いま ごご じ ぶん かいしゃ じ
時計を見て、僕は心の中で思った。今は、午後5時10分。いつもは会社を5時
ぶん で きょう おそ 30分に出るのに、今日は遅くなってしまった。もちろん、やるべき仕事を片づけ

ていたら遅くなったのだが、僕の心の奥深くには、うちに帰りたくないという気持ちもあった。

僕は先月50歳になった。83歳の母親と二人暮らしだ。結婚はしていない。母親と二人だけの生活に、何も問題はなかった。僕が仕事で遅くなっても、母親は一人で晩御飯を食べて、テレビを見て、お風呂に入る。僕がうちに帰り着いたときには、母親はベッドで先に休んでいた。特に手間のかかることは何もなかったのだ。

そんな生活が変わり始めたのは、3年前だ。母親の様子が少しずつ、おかしくなっていた。最初はどこに眼鏡を置いたかを忘れるとか、親戚の人の名前が出てこないとか、そんな小さな物忘れだった。でも、忘れることがどんどん多くなっていた。

そんな母親を見ていると、僕はいろいろと考えてしまう。いつまで母親をあの家に一人で置いておけるだろうか。そろそろ、老人のための施設を探したほうがいいんじゃないか。でも、母親を施設に預けるなんて、できるだろうか。僕は自分が世界で一番汚い人間になったような気分になった。そして、いや、そんなことはできないという結論を出す。こんな自分の中での問答を最近は何度も繰り返している。

そういえば、最近イライラすることが増えてきた。母親の物忘れに何度も怒りをぶつけた。母親はとても小さな声で「ごめんね」を繰り返した。それは、謝っているようにも、イライラしている僕を責めているようにも聞こえた。僕は暗

い^{きもち}気持ちになった。



あ^{あか}の^{こい}鯉^{さいご}の^みぼりを最後に見たのは、いつだっただろうか。僕が^{ぼく}小学^{しょうがっこう}3年^{ねん}生の^{せい}ときに^{そふ}祖父^しが^し死^しんだ。祖父^{そふ}が^し死^しんだ^{こと}で、僕^{ぼく}は^{かぞく}家族^{なか}の中^{なか}で^{ひとり}たった一人^{ひとり}の男^{おとこ}になった。祖父^{そふ}が^いい^{なくな}って、家^{いえ}では^{こい}鯉^あの^{ぼり}を^あ上^あげる^{こと}も、柏^{かしわもち}餅^{つく}を作^{つく}る^{こと}も^しな^{なくな}った。鯉^{こい}の^{ぼり}は^{もの}物^{おき}置^{なか}の中^{なか}の^{どこ}どこ^{かに}に^{しま}ま^われた^{まま}にな^なった。

祖父^{そふ}が^し死^しんで^{から}も、母^は親^{おや}の^{まい}毎^{まい}日^{にち}は^{それ}それ^{ほど}変^かわ^らな^なか^つた。毎^{まい}日^{にち}決^まい^ちき^きま^つた^時時^じ間^{かん}に^しじ^{ごと}に^で出^でか^かけて、特^{とく}に^{ざん}残^{ざん}業^{ぎょう}も^なく^だい^{たい}は^{てい}定^じ時^じに^{かえ}帰^{かえ}っ^てく^る。祖^そ母^ぼと^{いっ}し^ょに^{ぼん}晩^ご飯^{はん}を作^{つく}って、家^か族^{ぞく}3人^{にん}で^た食^たべ^る。晩^{ばん}ご^{はん}は^{なぜ}なぜ^か魚^{さかな}と^か煮^に物^{もの}と^かが^{おお}多^{おほ}く^て、子^こども^の僕^{ぼく}に^は物^{もの}足^たり^なく^感じ^るこ^とが^あっ^た。た^まに^{にく}肉^{にく}が^で出^でて^くる^ことも^あっ^たが、母^は親^{おや}も^そ祖^ぼ母^ぼも^あん^{まり}食^たべ^なか^つた。僕^{ぼく}の^{さら}皿^{うえ}の上^{うへ}には、一^{ひとり}人^{ひとり}だ^けの^{りょう}量^{りょう}の^{おお}多^{おほ}い^の肉^{にく}が^の載^のっ^てい^て、な^んだ^か僕^{ぼく}一^{ひとり}人^{ひとり}だ^けが^{にく}肉^{にく}を^た食^たべ^てい^るよ^うな^き気^き分^{ぶん}にな^なった。

祖^そ母^ぼは^僕僕^{ぼく}が^{こう}高^{こう}校^{こう}生^{せい}の^しと^きに^死死^しんだ。それ^{から}、大^{だい}学^{がく}生^{せい}に^なっ^て、僕^{ぼく}は^{ひとり}一^{ひとり}人^{ひとり}暮^ぐら^しを^はじ^めた。母^は親^{おや}と^は別^{べつ}々^{べつ}に^す住^すむ^よう^にな^なっ^たが、母^は親^{おや}は¹1^か月^{げつ}に¹1^回は^僕僕^{ぼく}の^アア^パート^{パート}に^やっ^てき^た。両^{りょう}手^てい^っぱ^いの^か買^かい^物物^{ぶくろ}袋^{にく}に^肉肉^やら^や菜^{さい}菜^やら^を詰^つめ^込込^めん^で、狭^{せま}い^だい^{どころ}の^{ちい}小^{れい}さい^{ぞう}冷^こ蔵^{ぞう}庫^こを^{いっ}ぱ^いに^して^{かえ}帰^{かえ}っ^てい^った。



僕^{ぼく}が⁵¹51^歳歳^{さい}に^なっ^た年^{とし}の²2^月月^{がつ}の^こと^だ。僕^{ぼく}は^いろ^いろ^と迷^{まよ}っ^たが、母^は親^{おや}を^し施^{せつ}設^{せつ}

い に入れることにした。きんじょ ろうじん のための しせつ あき が で 出たのだ。そこなら、はい
るのに必要な ひつよう ひよう 費用を、ははおや ねんきん はら 母親の年金で払うことができた。ぼく ははおや しせつ おく
って行ったとき、ちょうど うめ はな まんかい 梅の花が満開だった。さいきん くら かお 最近、暗い顔をしていることが
おお ははおや 多い母親だったが、その日は ひ うめ はな 梅の花のいい かお つつ 香りに包まれて、すこ あか かお み
た。少し明るい顔を見せ

ははおや いえ 母親のいなくなった家は はずいぶんと しず 静かになった。ははおや しんぱい 母親を心配することは すぐ
なくなつたが、それで ぼく きも かる 僕の気持ちが軽くなり はしなかつた。ぼく ひとり ゆうしょく を
つく ひとり た 作り、一人で食べ、ふろ はい 風呂に入つて、すぐに ベッドに入つた。それは、とても しず
な せいかつ 生活だった。

1 げつ 1 かい かなら 1 か月に1回は必ず、ははおや ようす み い 母親の様子を見に行つた。あま す ははおや
さいきん た 最近 はあんまり 食べなくなつていた。いろいろな お菓子 を持っていつても、その
なか いちばんちい 中の一番小さいのを て と 手に取つて、ひとくち た 一口食べると、あとはもう ぐち い 口に入れようとしな
かつた。りょうて お菓子 も 両手いっぱいのお菓子を持っていつても、けっきょく そのほとんどを ぼく じ
ぶん いえ も 分の家に持つて帰ることになつた。かえ

とし その年の ゴールデンウィーク。かいしゃ れんきゅう ぼく 会社は連休だ。僕は ゆっくりと み じたく 身支度をして、
ははおや しせつ む 母親のいる施設へと向かつた。でんしゃ まど そと なが 電車の窓から外を眺めていると、いくつかの家に
こい は 鯉のぼりが あ が上がつていた。ぼく こ あこが なんびき こい 僕が子どものころに 憧れていた、何匹もの鯉のぼ
りが つら 連なつている、りっば 立派なセットだ。そして、ぼく じぶん こい おも だ 僕は自分の鯉のぼりを思い出した。
おお いっぴき あか こい ぼく わら あの大きな、一匹だけの赤い鯉のぼり。僕は なんだか おかしく なつて、笑つた。

なんだったんだろう、あの馬鹿でかい鯉のぼりは。

僕の家族は、理想的な形じゃなかったかもしれない。でも僕は、あの大きな鯉のぼりのしっぽを体に巻き付けて、遊んでいたころを思い出すたびに、幸せな気分になる。一匹だけだったけど、僕を守ってくれた鯉のぼり。家族を支え続けた、たった一人の母親。

今日は駅前の和菓子屋で、柏餅を買っていこう。母親が一口だけでも食べてくれたら、きっと僕はうれしくなるだろう。

(2725字)

(2022.8 Written by Yuki MORI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典:「たどくのひろば」(<https://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.